

福童町遺跡12

—福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第303集

2016

小郡市教育委員会



序

福岡・久留米両市のベッドタウンとして開発と発展を遂げてきた小郡市では、これまで大規模な宅地造成や工業団地建設に先立って、埋蔵文化財の発掘調査が行われてきました。これにより、三国丘陵上の弥生時代の遺跡群や、中部の官衙遺跡群が発見され、当市がさまざまな歴史に彩られた地域であることが明らかにされました。

近年は、市街地の再開発や小規模な宅地造成が市内各所で進んでいます。これに伴って、新たな遺跡が次々と確認されており、特に中世・近世の小郡に関する資料が蓄積されつつあります。中世戦記文学『太平記』に記された「大保原合戦」の時代の小郡、久留米藩の穀倉地帯として農村が営まれた時代の小郡の姿が、埋蔵文化財からも復元されてきています。

わたしたちの暮らす街には、埋蔵文化財をはじめとするたくさんの文化遺産があります。それらに目を向けることで、より深くふるさとを知り、日々の生活を豊かなものにできるのではないのでしょうか。本書が、その一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査において関係各位と地元西福童区のみなさまには多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月 31 日
小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例言

1. 本書は小郡市福童に所在する埋蔵文化財包蔵地・福童町遺跡地内で計画された、宅地造成に先立って実施した発掘調査の報告書である。
2. 本報告書に掲載した遺構図面は調査担当者が作成した。
3. 発掘現場での遺構写真は調査担当者が撮影した。
4. 出土遺物の洗浄・復元には佐々木智子・藤岡恵子・永富加奈子・山川清日の協力を得た。遺物実測は調査担当者が、遺構図面の製図は宮崎美穂子、遺物実測図の製図は久住愛子が行った。
5. 本調査に関わる出土遺物・写真・カラースライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。

凡例

1. 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に拠っている。
2. 本書で用いた標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。
3. 本書で用いている略号は以下のとおりである。

溝状遺構：SD 土坑：SK

本文目次

I. 調査の経緯と経過	1
(1) 調査の経緯	
(2) 調査の組織	
(3) 調査の経過	
II. 位置と環境	2
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III. 福童町遺跡 12 の遺構と遺物	6
IV. 調査成果のまとめ	8

挿図目次

第1図 調査地位置図(S=1/5,000)	3
第2図 周辺遺跡分布図(S=1/25,000)	3
第3図 福童町遺跡12 遺構配置図(S=1/100)	4-5
第4図 1号土坑 平・断面図(S=1/40)	6
第5図 1号溝 出土土器(S=1/4)	7
第6図 1号溝 土層断面図(S=1/40)	8

図版目次

図版1	①福童町遺跡 12 全景 (南から)
	②福童町遺跡 12 全景 (北から)
図版2	①1号土坑 土層断面 (南から)
	②1号土坑 完掘状況 (西から)
	③1号溝東壁面 土層断面 (西から)
	④1号溝西壁面 土層断面 (東から)
	⑤1号溝 完掘状況 (西から)
	⑥1号溝 完掘状況 (東から)
	⑦出土土器

I. 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

福童区は小郡市の南西部に位置しており、南部は筑後平野に連なる沖積地で田園風景が広がる。ここで初めて発掘調査が行われたのは平成16年度で、古墳時代の集落遺跡が存在することが確認された。その後、平成19年に一部が「市街化区域」に編入され、以後宅地造成が進んでいる。近年、これに先立つ発掘調査が頻発しており、15次にわたる調査（福童東内畑遺跡・福童法司遺跡を含む）が行われている。これまでの調査で、福童町遺跡は中・近世を中心とする複合遺跡であることが判明している。

本遺跡の調査は、平成23年度に宅地造成計画に先立って「埋蔵文化財の有無に関する照会」（事前審査番号11093）が提出されたことに始まる。計画用地は、市道を隔てて南北2か所に分散している状況であった。これを受けて試掘調査を実施した結果、双方に埋蔵文化財が存在することを確認したため、協議が必要である旨の回答を行った。開発業者と小郡市教育委員会で協議した結果、造成工事の都合上、南北それぞれの用地に対して別途調整を行うこととなった。北側用地は平成24・25年度事業として発掘調査を行っている（市文化財調査報告書第282集）。

その後、南側用地については協議を継続し、平成26年度事業として現地調査を実施し、翌年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。なお、双方の用地内において、新設道路部分のみを調査対象としている。

(2) 調査の組織

調査に関わった組織と担当者は下記のとおりである。

＜小郡市教育委員会＞

教育長 清武 輝

部長 佐藤秀行

文化財課長 片岡宏二

係長 柏原孝俊

技師 上田 恵

＜調査参加者＞ 石井京子 佐藤照子 深見篤志 松永康弘 宮崎隆明

（以上小郡市在住、五十音順）

(3) 調査の経過

発掘調査は平成26年4月30日から5月19日にかけて実施した。調査区はいずれも当時の現況G.L.から60～70cm下までの近年の耕作土を重機で掘り下げ、その後人力で遺構の検出・掘削を行なった。

以下に調査日誌より調査の経過の概略を記す。

平成26年4月30日	重機による表土掘削、機材搬入
5月7日	測量作業実施、人力による遺構検出・掘削開始 溝状遺構1条、土坑1基、ピット群を検出 以後随時写真撮影・遺構図化による記録作業を並行して実施
15日	全ての遺構掘削終了
16日	重機による表土埋め戻し開始
17日	埋め戻し終了、機材撤去
19日	現地立会の上引き渡し

以後、図面・出土遺物の整理作業を実施。なお、引き渡し後開発工事が実施され、現在遺跡は消滅している。

II. 位置と環境

(1) 地理的環境

小郡市域は宝満山から派生する宝満川によって東西に二分される。東岸には標高1309mの花立山(城山)が、西岸には脊振山系に由来する通称・三国丘陵があるが、それ以外の地域は低台地と沖積平野が広がり、これが南の筑後平野へ連なっている。低台地の多くは小河川の浸食によって舌状に独立した形状をとっており、これまでの発掘調査でこの台地上に多数の遺跡があることが確認されている。

今回調査した福童町遺跡は、市域中南部の低台地とその間の谷底平野にまたがって展開している。

(2) 歴史的環境

「福童」の地名は「福同」もしくは「福堂」の表記で南北朝期の文献から登場し、中世戦記文学『太平記』に記された福童原合戦で特に著名である。近年道路改良工事や宅地造成に起因する発掘調査事例が多く、中・近世を中心に歴史的様相を復元できる考古資料が次々と確認されている。以下、周辺地域に分布する遺跡を中心に、当該地域の歴史的環境の概要を示す。

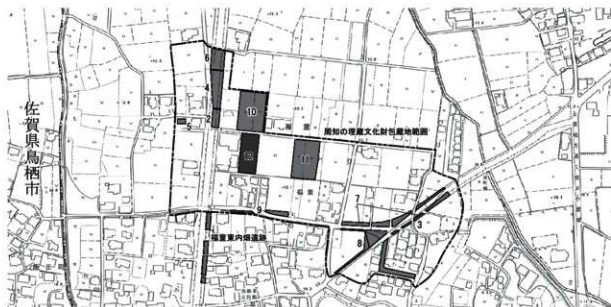
旧石器・縄文時代の遺構・遺物は、花立山周辺や三国丘陵上など各所で散見されるが、まとまりをもって検出された例は未だない。この地域では福童町遺跡6(12)で鐘崎式土器の小片が1点出土している。弥生時代になると、前期の早い段階で三国丘陵の各所に集落・墓域・生産域の開発が始まり、その後市内全域へと拡大していく。中期になると中南部の小郡(1)・大板井(2)遺跡に大規模な集落が成立し、この地域の拠点的な存在になったと考えられる。この集落を経営した集団は、小郡若山遺跡(3)で出土した多鈕細文鏡や、大板井遺跡で不時発見された銅戈といった祭器を所有しており、その権勢のほどがうかがえる。また、寺福童遺跡4(8)では銅戈9本を伴う埋納遺構を、寺福童遺跡5(6)では前期から中期にかけての墓域を確認しており、今回調査区の周辺にも有力な集落が存在したと考えられるが、その具体的な位置や規模は未だ不明である。

古墳時代に入ると、本遺跡の周辺で大崎小園遺跡(5)や福童町遺跡1(16)といった前期の集落と、方形周溝墓を伴う寺福童遺跡(10)のような墓域が成立し、後期から末期にかけての集落・墓域へと継続して経営されるようになる。

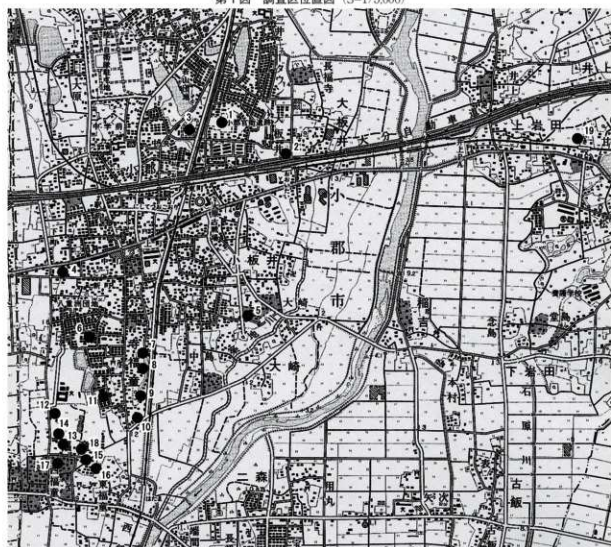
律令期の小郡市は「筑後国御原郡」と命名され、ここを統括する施設が上岩田遺跡(19)に整備される。上岩田遺跡は役所である官衙としてだけでなく、寺院の施設を併せ持つ初期評衡と呼ばれるタイプの郡衙遺跡であることが明らかとなっている。御原郡衙は、その後小郡官衙遺跡(1)を經由して、大刀洗町下高橋官衙遺跡へ移転することが確認されており、全国的にも特殊な例として知られる。本遺跡の所在する福童区は筑後・肥前国境(現・佐賀―福岡県境)に面しており、このころこの境界に沿って西海道が敷かれていた。福童の古代集落の経営や糸里制施行に際しては、この西海道が大きな影響を及ぼしたと思われるが、現在まで確認されている同時期の遺構・遺物は少量であり、今後の調査に期待が寄せられる。

中・近世の遺跡は、本遺跡のほか福童山の上遺跡(4)で井戸や掘立柱建物群と、多数の陶磁器が確認されている。しかし、その全体像には不明瞭な点も多く、南北朝期の合戦の舞台であったこの地域が、農村村落の変遷にどのような影響を受けたのかは、今後詳細な検討を行う必要があるだろう。また江戸時代の福童は、久留米藩の財政を支える穀倉地帯であったが、これまでの近世遺構は生産域に該当する地域で確認されているのみであり、中世集落から近世集落への土地利用や集落形態の変化については今後の調査による資料の増加が待たれる。

このように本遺跡の周辺では、時期によって資料の疎密があるものの、弥生時代以来ほぼ連続と人間生活の営みが続けられてきた。

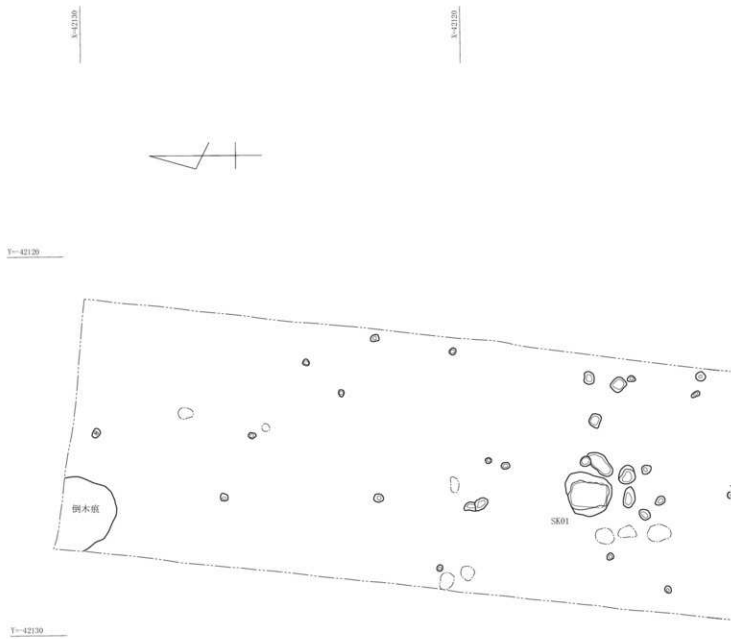


第1図 調査区位置図 (S=1/5,000)



- 1 小郡(小郡官街) 2 大板井 3 小郡若山 4 福島山の上 5 大崎小園 6 寺福島5 7 寺福島3 8 寺福島4 9 寺福島内畑下道東
 10 寺福島1 11 寺福島2 12 福島町4・6 13 福島町12 14 福島町10 15 福島町3・7・8 16 福島町1 17 福島東内畑
 18 福島町9 19 上野田

第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

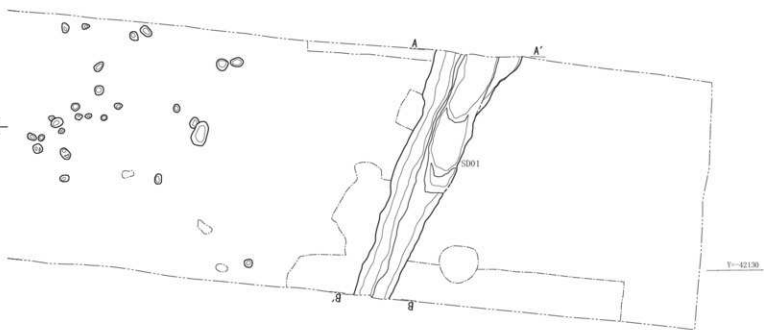


第3図 福童町遺跡12

X-42110

X-42100

Y-42120



Y-42130

X-42110

X-42100

遺構配置図 (S=1/100)

Ⅲ. 福童町遺跡 12 の遺構と遺物

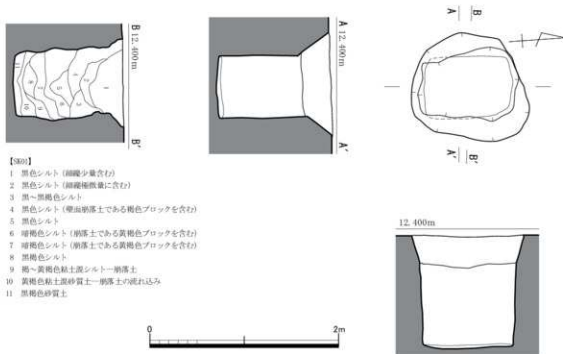
今回の調査区は、既調査地である福童町遺跡 10 の南隣にあたる約 250㎡の区画である。周辺の調査地では、中・近世の遺構・遺物を確認している。遺構の掘り込み面は褐色ローム（基盤層）で、標高 11.8～12.5m を測り、北から南へ緩やかに傾斜する。掘り込み面の上層には、全体的に黒色シルト層が認められるが、この中に遺物は全く含まれていない。

これまでの発掘調査から、調査区周辺は集落内の生産域と想定される箇所であり、今回の調査区でも遺構の密度は非常に低い状況であった。検出した遺構は溝 1 条と土坑 1 基、少数のビットにとどまる。出土遺物も溝の埋土を中心にごくわずかに見られるのみであった。

1 号土坑（第 4 図、図版 2）

調査区中央に位置する。主軸を南北方向にとり、長軸 1.24m、短軸 1.1m、深さ 1.15m を測る。上部が崩落によって変形しているが、平面プランは隅丸長方形と考えられる。壁面は、遺構検出面から 30cm 下までは斜めに、それ以下は直立して立ち上がる。黒色シルトを主体とする埋土がレンズ状に堆積し、部分的に基盤層の崩落土が混じる。形状と埋土の状況から落とし穴状遺構の可能性があるが、底面に逆茂木状の施設痕跡等は確認できなかった。

遺物の出土は皆無である。



第 4 図 1 号土坑 平・断面図 (S=1/40)

1号溝状遺構（第6図、図版2）

調査区南側に位置する。東西方向へ流れ、底面は西から東へ傾斜する。土層断面および平面の状況から、ほぼ同位置で3段階の掘削がなされたと考えられる。まず1段階目に北寄りの溝（東壁面埋土：15～19、西壁面埋土：7～8）が、次いで2段階の南寄りの溝（東壁面埋土：12～14、西壁面埋土：1～6）が構築され、最後に調査区内で断絶する3段階目の溝（東壁面埋土：1～11'）が掘削されている。

【1段階】

断面はV字に近い台形を呈する。残存する掘り込み面の幅は最大0.7m、底面幅は0.2m、深さは最大0.8mを測り、調査区西端と東端の底面レベル差は20cmである。南側にテラス状の構造を持つ可能性がある。埋土は黒褐色土を主体とする。

【2段階】

断面は長方形に近い台形を呈する。掘り込み面の幅は最大1.2m、底面幅は0.8m、深さ最大0.45mを測り、西端と東端では底面レベルに50cmの差がある。埋土は暗褐色土を主体とし、前後の段階と比較するとややしまりが悪い。

【3段階】

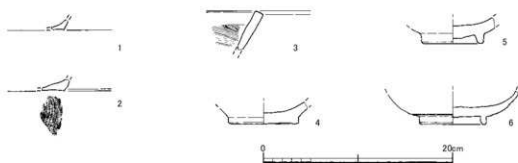
断面は台形を呈し、南側に部分的にテラス状の構造を持つ。掘り込み面の幅は最大2.0m、底面幅0.85m、深さ最大0.9mを測る。西端と東端では底面レベルに40cmの差がある。埋土は褐色土を主体とする。この段階の溝のみ、調査区の中央で立ち上がって断絶する。

出土遺物（第5図、図版2）

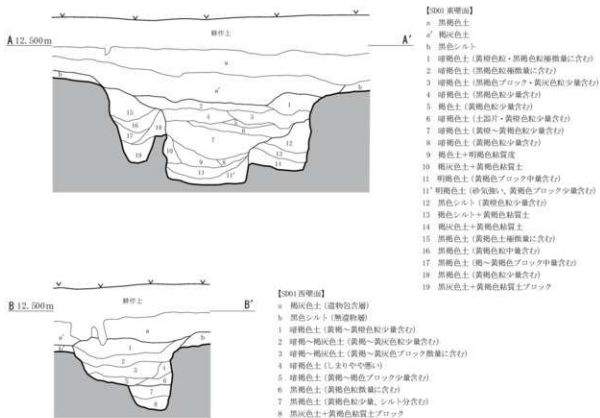
埋土からごく少量の土器が出土しているが、いずれも小片で2次のな摩滅が激しい。1・2は土師器の小皿片。いずれも底部は回転糸切りで、体部にややひずみがある。破断面は著しく摩耗している。3は瓦質土器の鉢。残存部分に播目はないが、形状から播鉢と考えられる。4は白磁碗の底部。残存部分の外側は無軸のケズリ調整で、高台はわずかに立ち上がりが認められる。5・6は青磁碗の底部。4は高台内部に部分的な軸ハギが見られ、そのほかは全面に施軸してある。6は畳付部分の軸を削り取っている。見込みの中央部に印花花文と思われる痕跡があるが、摩滅が激しく詳細は不明である。釉薬の発色が悪く、黒味がかっている。いずれも中世の所産であるが、遺構の時期を決定する根拠とはしがたい。

その他の遺構（第3図）

調査区の北西端で倒木痕を1基検出している。大半が調査区外に相当するため、掘削は行っていない。



第5図 1号溝 出土土器 (S=1/4)



第6図 1号溝 土層断面図 (S=1/40)

IV. 調査成果のまとめ

福童町遺跡および福童法司・福童東内畑遺跡のこれまでの調査成果から、この地域では弥生時代前期末から近世末まで、断続的に集落が経営されていたことが明らかとなっている。弥生時代の遺構は現在まで溝状遺構1条が確認されているのみで、集落の様相は全く不明である。古墳時代の遺構は、前期・後期ともに周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲の南側にまとまって検出されており、この辺りが中心であったと判明している。

古代の遺構は溝状遺構が複数検出されており、走行する方向はほぼ南北に限定される。遺跡の所在する西福童区は筑後・肥前の国境（現・福岡・佐賀県境）から260m程度の距離であり、近年まで田圃の区割りに古代以来の条里区割が残存していた。国境に沿って当時の幹線道路ともいえる西海道が走行しており、条里区割もこれと方向を同じくして設定されたと考えられる。南北に走行する溝状遺構は、この条里区割と関連する可能性が高い。

中・近世の遺構は包蔵地内全域で確認されており、数も多い。しかし、溝状遺構がほとんどで、掘立柱建物に限られた範囲にごくわずかに見られるのみである。中世の溝状遺構は集落域を大きく区画するものと、その内部の小区画を圍繞するものの2パターンがあるが、今回検出した溝は規模から小区画を示す施設と思われる。中・近世の遺構群は、近接した位置に繰り返し構築される傾向があり、中世集落の土地区画や施設の一部分が近世まで継承されたと推測される。ただし今回調査区の溝は、明治期の地籍図に記載されている水路群とは一致せず、中世集落のみで機能していたようである。また、この地域の中・近世集落遺跡は、福童東内畑遺跡を除き、遺構密度が低く、遺構に伴う遺物が極めて少ないという特色がある。今回調査区でも同様の傾向であり、中・近世集落の歴史的状況を復元するには、今後の周辺調査成果の積み重ねに期待するところである。



①福童町遺跡 12 全景 (南から)



②福童町遺跡 12 全景 (北から)

図版2



①1号土坑 土層断面 (南から)



②1号土坑 完掘状況 (西から)



③1号溝東壁面 土層断面 (西から)



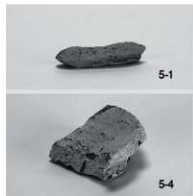
④1号溝西壁面 土層断面 (東から)



⑤1号溝 完掘状況 (西から)



⑥1号溝 完掘状況 (東から)



5-1



5-2



5-4



5-5



5-6

⑦出土土器

報告書抄録

ふりがな	ふくどうまちいせき							
書名	福童町遺跡 12							
副書名	福岡県小都市福童所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小都市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第303集							
編著者名	上田 恵							
編集機関	小都市教育委員会							
所在地	〒838 - 0198 福岡県小都市小郡 255 - 1 Tel. 0942 - 72 - 2111							
発行年月日	2016 (平成 28) 年 3 月 31 日							
保管場所	〔写真・図面・遺物〕小都市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒838 - 0106 福岡県小都市三沢 5147 - 3 Tel. 0942 - 75 - 7555							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
福童町遺跡12	小都市 福童	40216		33° 38' 22"	130° 54' 55"	20140430 ～ 20140519	251 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
福童町遺跡12	集落	中・近世	溝・土坑 ピット		土師器・陶磁器			
特記事項	既調査地では、これまで明治期の地籍図に記載されている溝と対応関係が把握できる遺構が確認されており、近世の土地区画がその後も踏襲されていたことが明らかとなっている。今回調査地点で検出した溝状遺構は、これらと連続性のない遺構であり、近世以前の土地利用を解明する上で貴重な資料である。							

福童町遺跡12

—福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告—
小郡市文化財調査報告書第303集

編集 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡255-1

出版 片山印刷有限公司
福岡県小郡市祇園1丁目8-15